

目的 公園緑地は市民の生活空間に不可欠であり、その実態の解明は生活科学の重要な課題と考えられるが、その研究例は数少ない。この研究は、歴史的都市である京都の、1世紀に近い古蹟をもつ京都御苑を対象に、緑地における来訪者の生活行動を検討する。

調査 京都御苑。京都御所の外苑で環境方針の所管であり、面積15ha、共生苑地、運動広場、少年球場、児童遊園等をもつ総合公園緑地。今回、発表は、昭和51年の夏、秋、53年の春、各休日の11、13、15時の時点、苑地の来訪者の滞在実態を、性、年齢、行動形態、分布位置などを視認、記録した結果の分析と考察である。

結果 調査各例について、終日来訪者総数は1.5万人程度。性、年齢構成は、男子は少年16%青年31%老年10%、女子は少年12%青年20%老年10%。上記3調査時点での比較では15時が終日来訪者数の15%強で最大を有す。その分布は、男子少年の少年球場、女子少年の児童遊園、男子青年の運動広場への集中が注目される。分布の密度をみると、少年球場の65人/ha、児童遊園の150人/haが許容密度の70%、共生苑地、苑路が60人/haで許容密度の50%であるのに対し、運動広場においては、平均150人/haであり許容密度の2倍以上であった。なお、この発表は昭和51年以降の継続研究の一部であり、総合結果は更にまとめられようである。

(参照) 近藤公夫 緑地レクリエーションの計画的な研究(第2報) 京都大学演習林報告  
北口照美・近藤公夫 第29回日本家政学会研究発表講演要旨(E-12)